

悲劇の武将 齋藤別当実盛

妻沼地域文化財調査研究会 鈴木 忍

妻沼聖天山を開創した「齋藤別当実盛」は、平安末期の武将で保元・平治の乱で活躍し、源平合戦のはじめ木曾義仲と戦い壮絶な死を遂げた悲劇の武将として、平家物語・源平盛衰記などの書物に記され、歌舞伎の「実盛物語」や能・謡曲の「実盛」、また、尋常小学校唱歌「齋藤実盛」などによって、当時、何万・何十万人といた武将の中で、熊谷次郎直実などと共に、現在に語り継がれている希少な武将であります。そこで、齋藤別当実盛公の生涯と人物像について簡単に紹介したいと思います。

実盛は天永二年（1111）、越前国南井郷（現福井県鯖江市）の、河合齋藤則盛の子・助房として生まれた。13歳の時、武蔵国長井の庄司・齋藤実遠の息子・直実の養子となり、養父・直実の「実」と実父・則盛の「盛」をとり「実盛」と命名する。31歳の時、養父・実直が他界した為、家督を継いで長井庄司となった。

久寿二年（1155）、武蔵嵐山の大蔵館の源義賢を、源頼朝の嫡男・悪源太義平が夜襲し、叔父・義賢を殺害、息子の駒王丸（後の木曾義仲）は母・小枝御前と逃れ、畠山重能に救い出された。実盛は重能から駒王丸の身を委ねられ、長井庄でかくまっていたが探索が及ぶのを避けるため、母子を駒王丸の乳母の夫である、信州木曾の中原兼遠の許に送り届け養育を託した。

保元元年（1156）、保元の乱が起こり、実盛は源頼朝に従い出陣、悪七別当を討ち取るなど名を馳せる。続く平治元年（1159）の平治の乱は、源義平に従い出陣、侍賢門の攻防では熊谷直実・岡部忠澄らと坂東十七騎に名を連ね活躍、敵将・平重盛をギリギリまで追い詰めるが、最終的には平家に大敗を喫した。

平治の乱以降、平家全盛の世となり長井庄は平宗盛の領地となったが、実盛は武士としての剛勇さと手腕を買われ、宗盛から家人への要請を受け悩んだ末に受諾、従来通り長井庄の庄司を務める事となった。



齋藤別当実盛像（妻沼歓喜院）

武士の本分は「一所懸命」一つの所に命を懸けること、所領の安堵と領民の安穩を守ることが武士として当然の行いであった。実盛はこの間、荒野を開拓し、畠山重能と相談、荒川の水を引き耕地の拡大に力を注いでいる。そして古希を迎えた治承三年（1179）、篤い信仰心を持つ実盛は、庄内の安泰と領民の平和と繁栄、また、戦場に散った多くの将兵の霊を慰めるため、己の守り本尊である「大聖歓喜天」を古社に祀り「聖天宮」と奉称し、長井庄の総鎮守とした。

治承四年（1180）、伊豆で挙兵した頼朝は石橋山の合戦で敗れ房総に逃亡するが、陣を立て直し伊豆に戻り、平維盛を総大将とする平家軍と、富士川で対陣した。この時、多くの坂東武士は源氏に復帰したが、義理人情に厚い実盛は恩を受けた平家方として出陣した。しかしこの合戦は弓矢を交える事なく終わった。

寿永二年（1183）、信濃で挙兵した木曾義仲は、北陸道から京へ攻め上がっていった。平家は10万の兵で義仲の討伐に出陣することになった。実盛は出陣に際し主君の宗盛に、自分は年老いて70余歳になった。また、先の富士川の合戦で戦わずして引き上げた、事に悔いがある。今回の出陣でたとえ自分は討ち死にしても未練はないが、越前は自分の生まれ故郷であり、知り合いも多いので無様な姿は見せたくないと錦の直垂の着用を願い出た。宗盛は実盛の決死の覚悟に感じ入り自分の赤地錦の直垂を下賜した。実盛は宗盛から拝領した赤地錦の直垂を着て、年老いた武士と侮られないよう白髪や鬢鬣を墨で染め出陣した。

平家軍は俱利伽羅峠の戦いで総崩れとなり篠原へと退いた。義仲軍は更に追撃してきたが、逃げ落ちる平家軍の中で、実盛は只一騎で踏み止まり奮戦していた。そこへ信州諏訪の若武者・手塚光盛が一騎打ちを挑んで来た。勝敗はなかなか決しなかったが、年老いた実盛は力尽き、光盛に討ち取られてしまった。

光盛は義仲に戦果の報告をした。「不思議な武将を討ち取りました。武士かと思えば錦の直垂を着て、大将かと思えば軍勢も少なく、名を名乗れと云っても名乗らず、西国の者かと思えば言葉は坂東なまり、鬢髪が黒いのに老武者のようです。」と報告すると、義仲はじっと考え、もしや武蔵の斎藤別当実盛ではないか、樋口兼光なら見知っておろうと兼光を呼んだ。兼光は一目見るなり涙を流し「無残やなこれは確かに斎藤別当実盛に相違ございません」と答えた。義仲は「それならとうに70を超えて白髪になっている筈なのに、髪や鬣が黒いのはどう云う事か。」と訊ねた。

兼光は「実盛殿は以前、私と出逢った時に60を過ぎて戦に臨む時は、老武士と侮られないよう白髪や鬣を黒く染め出陣するのだ。」と申しておりました。そして傍らの池で首を洗ってみると白髪が現れ実盛だと確認できた。義仲は自分の幼い時、武蔵の大蔵館で父の義賢が悪源太平に討たれた時、自分を助けかくまい木曾まで逃してくれた命の恩人である実盛と、時代の流れとは言え敵味方となって戦い、変わった姿の実盛を見て、周りをはばからず泣き崩れたと伝わ

っている。義仲は兼光に命じ、実盛の首を手厚く葬り、塚を築いて供養し、実盛の兜は小松の多太神社に奉納した。

現在、石川県加賀市の篠原古戦場跡には、「実盛塚」と「首洗い池」が現存し国の史跡となっており、兜は小松市の多太神社に保存され国の重要文化財に指定されております。

江戸時代、奥の細道の道中、多太神社を詣でた芭蕉が「むざんやな甲の下のきりぎりす」と云う句を残しており、近代では、実盛塚を訪れた与謝野晶子が、「北海が盛りたる砂にあらずして木曾の冠者がきづきたる塚」と詠んでいます。

(熊谷市公連だより 第10号 平成22年より)